

コーネル大学から

小林 一三

1. はじめに

日本をはなれてから一年以上の月日がたつ。昨年の6月20日わたくしは、京大東南アジア研究センターからの留学生として、アメリカへやってきた。最初の2ヶ月間は、American Economic Association 主催の Economics Institute という外国人留学生のためのオリエンテーション・コースに出席するため、コロラド州の University of Colorado に滞在した。9月以降は、ニューヨーク州の Cornell University にうつり、そこで1964年の秋学期と1965年の春学期をすごした。以下は、この一年間におけるわたくしの留学生生活のかんたんなレポートである。

2. Economics Institute

Economics Institute は、1958年に、American Economics Association が主催者となり、Ford Foundation の財政的援助のもとに発足したものである。アドミニストレーションは、Institute of International Education (I. I. E.) が受けもっている。

この機関の設立主旨は、外国の学生が、米国の大学院で学ぶために必要な、経済学および農業経済学にたいする専門的知識を準備するため、とされている。わたくしが出席したのは、その第7回目の講習会であった。プログラムの内容は、大別して、①経済学の基礎理論についての講義、②英語のトレーニング、③アメリカの大学制度、アメリカ経済学の紹介、④数学、⑤レクリエーション、その他であり、世界各国からあつまった約60人の学生は、大学の寄宿舎へ合宿して、これらのプログラムに参加した。学生の出身国はさまざまだったが、そのほとんどが、ラテン、アメリカ諸国、東南アジア諸国、アフリカ等、いわゆる低開発諸国から来ていた。日本からは、沖縄をふくめて、7人が参加していた。

①の経済学基礎理論は、前半は macroeconomics

後半は microeconomics で、Samuelson の“Economics”程度の授業が、毎日おこなわれた。②の英語トレーニングについてはとくべつ書くまでもなく、英語をよりよく「読み、書き、話す」ためのレッスンである。①、②は1クラス10人位ずつのグループに分けて行なわれた。③は毎日1回、大きな教室で、講演形式で行なわれた。これには、ミシガン大の K. E. Boulding、エール大の N. W. Chamberlain、シカゴ大の H. G. Johnson、ヴァンデルビルトの A. M. Tang など、日本でも、よく知られた Professor たちがぞくぞくと顔をみせた。

Economics Institute でおこなわれた経済学の講義、講演の特徴は、それらがすべて、いわゆる近代経済学のものにかきられていたことであろう。批判の対象として引き合いに出されることはあっても、マルクス経済学の説明といったようなことはなされなかった。そして、授業申ししばしば今までマルクス経済学を学んできた者とプロフェッサーとの間に、はげしい議論がひきおこされた。④の数学は、経済学の基礎的な用具となる部分についての講義がなされた。⑤のレクリエーションとしては、近くのロッキー山脈や、ゴースト・タウンへのバス旅行、フォークダンスなどがあつた。

あつまった学生たちの言動には、やはり出身国の色彩がにじみでていたようである。ラテン・アメリカの学生は概して、よくしゃべり、よくさわいでいた。政情不安定な国からきたものほど、政治的な議論をよくしていたようである。東南アジアでは、タイ、インドネシアからそれぞれ5人以上きていたが、いろいろな意味で対照的だった。タイの連中は食堂などでグループをつくっても、もくもくと食事していることが多かった。インドネシアの学生たちはあつまると大変にきやかであった。タイの連中は、あまり政治的な話を好まず、いわゆる世間話という感じの会話がなかった。それにひきかえ、インドネシアからの学生は、ナショナリズムむきだして、よく政治的な議論をしていた。かれらにとってスカルノは大きな存在らしく、「羊のようなアメリカ人」の筆者レーデラーが、スカルノの批判めいたことをいったために、インドネシアからの学生にかこまれてつるしあげられるというシーンがあつたという。レクリエーション・プログラムのひとつとして、自分達の国をいろいろな角度から紹介するシ

ョーがあったが、それもインドネシアの学生がまさきに買って出た。われわれ日本から来たものも、戦後日本における経済成長の分析や、さくらさくら、花の斉唱などをして好評だった。われわれは、沖縄から来た人も含めてやったのであるが、よく沖縄と日本との関係を外国の学生たちから聞かれた。日本人があんがい無関心でいるうちに、沖縄はどんどん一人歩きはじめ、かえって外国人のほうが、その持つ重要性をすどく把握しているように感じられた。

3. コーネル大学, 概要

コーネル大学は、1865年に創立された。だから今年



写真1 コーネルのキャンパス
(右手正面 Uris Library, 左手正面 Olin Library)

が創立100周年となる。100年目の誕生日を記念して、さまざまな行事がもよおされた。世界中のいろいろな大学からのお祝い状が図書館のちんれつだなにかざられ、そのなかには、東大大河内教授、京大奥田教授両総長からのお祝い状もまじっていた。コーネルのもっとも大きな特徴は、private school と public school の共存ということにあるだろう。コーネルのキャンパスは、大へん美しいこととともにスロープがきついで有名であるが、Arts and Science を中心とする private school はスロープの下の方に位置し、Agriculture, Home Economics, Industrial and Labor Relations などの state school はスロープの上の方に位置している。そこで、private school は“lower campus” State school は“upper campus” とよば

れるのであるが、この両者のもつ雰囲気は、かなりちがうようである。ひとくちでいえば、lower campus は、「よりアカデミックな」感じがし、upper campus は「よりプラグマティックな」感じがする。また New York State からの莫大な財政援助のおかげで、upper campus は金回りがよく、lower campus は、とくべつのところをのぞき金回りがよくないのだという。だから、「どうしても奨学金をとりたかったら upper campus をねえ」とはよくいわれている。もっとも、最近では、state と private が複雑に入りまじってきているようだから、極度の一般化は危険であろう。

つきにコーネルの特徴としてあげられるのは、graduate program と undergraduate program 両方に、相応のウェイトがかけられていることである。最近のアメリカの有名な大学における undergraduate 軽視の風潮は一般的であり、undergraduate の講義は full professor がやらず、graduate assistant がほとんどもつというようなケースさえある、と聞いているが、コーネルは state school をもつためか、undergraduate の教育も相当熱心におこなわれている。日本における graduate program の貧弱さは、目にあまるものがあるが、こちらでは graduate school のよしあしが大学の研究

活動を評価する基準になっているから、大きな大学ではどこでも graduate school は大切にされているようである。コーネルには、いくつかの図書館があるが、その総元締である Olin Library は graduate student のための図書館とされている。コーネルにおいては、undergraduate も大切にとりあつかわれていると述べたが、それはあくまでも教育という見地からで、研究ということになると、undergraduate の学生は、特別な許可がないかぎり、Olin Library の書庫には入れず、その他さまざまな制限が加えられている。コーネルの学生は、毎年約12,000人とされているが、そのうち undergraduate student は約9,000人、graduate student は約3,000人とみなされている。

さらに、もうひとつコーネルの特色をあげておこう。それは、外国人学生がかなり多いということである。他の大学の実情は知らないから、これが特筆すべきことであるかどうかは知らないが、とにかくキャンパスを歩いている、よくいろいろな人種にあう。これはコーネルが、international なプログラムをたくさん持っているということにも原因しているであろう。外国人学生の数は毎年約1,000人、全学生数の約1割にあたり、かれらは、85ヶ国からあつまって来ているとされている。

4. コーネル大学, Southeast Asia Program

コーネルにおけるアジア研究の中心は、Dept. of Asian Studies である。しかし、この学部は、わた

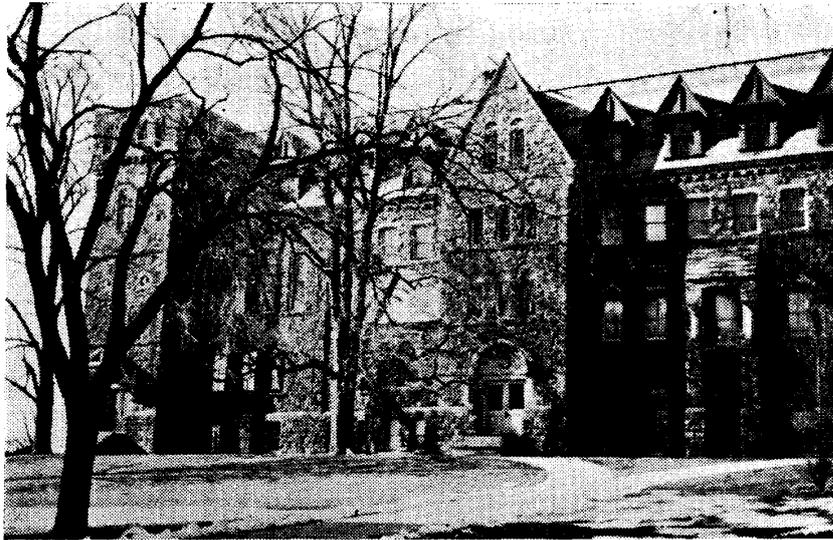


写真2 Dept. of Asian Studies のある Franklin Hall

くしのみたところでは他の学部と、ちょっと様子がちがうようである。たとえば、ph. D コースの学生は、特別な場合を除いては、Asian Studies を major subject としてえらぶことはできない。だから、Dept. of Asian Studies に属する学生は、ほとんどまた他の学部にも所属しているわけである。Dept. of Asian Studies も他の学部と同様、自分の建物をもっている。しかし、Asian Studies の建物に office をもっている professor は非常に少ない。現在、学部長の Professor Smith でも、ほとんどは Dept. of Anthropology の office にいるという具合である。それこれを考え合わせてみると、Asian Studies という学問は、アメリカにおいても、まだ自律性をもち

うるまでには成熟していないようである。あるいは地域そのものを研究対象とする学問は、アカデミックな分野として独立しにくいのであろうか。ともあれ、Dept. of Asian Studies は、機構としては存在している、実際的な活動は、そのなかにふくまれるさまざまなプログラムによって遂行されているということができよう。

現在、コーネルの Dept. of Asian Studies は、3つの大きなプログラムをもつ。China Program, South Asia Program, Southeast Asia Program である。このうちもっとも active なのは、Professor Kahin を Director とする Southeast Asia Program である。この Program が中心となって刊行するほう大な出版物については改めて述べるまでもないであらう。

この Program は、luncheon meeting と称して、毎月1回研究会をもつ。これは、Cornell Modern Indonesia Project の建物でおこなわれており、この会で、Southeast Asian Program のメンバーが顔を合わせることになる。この会の昨年度の lecture としては、Prof. Sharp の Northern Thailand の field work に関するもの Professor Johns のインドネシア文学および歴史に関するもの、Dr. Daniel S. Lev のインドネシア印象記、Dr. Tugby のインドネシア社会

の socialization に関するもの、Dr. Father Carrol のフィリピン経済発展における危機についてのもの、等々があった。Southeast Asian Program では、各学期に一つずつ東南アジアの特定の国をいろいろな面から検討するセミナーをもっている。1964年の秋学期には、Malaysia が予定されていたが、これは行なわれず、1965年の春学期には、Prof. Sharp が中心となって Thailand についてのセミナーがもたれた。

コーネルの Southeast Asian Study をとりあげるときに欠かすことのできないのは、東南アジア関係のデータの豊富さであろう。東南アジアのみならずアジア関係の書籍、データは Wason Collection として

Olin Library のなかに特別に管理されているが、タイ、マラヤ、インドネシア、フィリピン等、東南アジア諸国に関する蔵書は大変多く、偉容を誇っている。そして、graduate student ならだれでも自由に Collection のなかに入り、利用できるようになっていいる。Southeast Asia のものに比較すると South Asia, Far East に関する資料はあまり多くなく、また、整理もよくないようである。日本関係の資料などもかなりたくさんあるのだが、未整理のまま、放置されているものが多い。これも、コーネルの Asian Study においては、Southeast Asia が圧倒的に重視されていることを物語る一つの例であろう。Southeast Asia という地域のなかだけでみても、Sharp—Anthropology—Thailand, Kahin—Government—Indonesia, Golay—Economics—Philippine, Echols—Linguistics—Indonesia というラインに沿っての一種の系列化が進んでいるようである。だから、この系列にうまく合うような area と subject をもっていないと、よい指導者、よいデータを得られないということもおこりうる。Southeast Asia 以外では、Skinner—Anthropology—China, Smith—Anthropology—Japan というのが、強力なラインとして考えられるであろう。

Southeast Asian Program は、アカデミックな活動だけでなく、しばしば啓蒙的な催しにも参加する。昨年度は、ヴェトナム問題に関し、有識者をあつめて、ヴェトナム・ウィーク・エンドと称する一連の講習会をもった。また、Prof. Kahin は「ヴェトナムは nationalism の勢力である」という認識のもとに、“teach— in” とよばれる学生の集会などにも出て来て、ジョンソン政策批判の陣頭にたっていた。

よく、東南アジア研究の方法に関して“Cornell System”という言葉が使われる。あたかも、それが非常に完成された統一的方法であるかのように。しかし実体は、いろいろな思想傾向とさまざまな方法をもった学者達の、それこそ非統一的な集まりのようにみ

える。そして、一見統一的な機構をもちながら、その内部で、ひとりひとりの学者の個性と理念と方法がぶつかり合っているというのが Cornell Asian Studies の現在のすがたではないかと考えている。

5. コーネル大学, International Agricultural Development Program

前項の Southeast Asia Program は、コーネル全体のプログラムである。もっとも、Anthropology, Linguistics, Government などが重視されているから、lower campus が中心となったプログラムとみることができよう。これに対して、upper campus の一つの代表である College of Agriculture が中心となって組織している海外研究の中に、この International Agricultural Development のプログラムがある。これには、Agricultural Economics, Agronomy, Agricultural Engineering, Entomology, Nutrition, Pomology, Rural Education, Rural Sociology, Vegetable Crops などの学部が参加し、東南アジアのみならず、ラテン・アメリカ、アフリカなどをふくむ、いわゆる低所得国全体についての研究計画を進行させている。財源は主として、New York State からである。わたくしの属している Dept. of Agricultural Economics でこのプログラムに関係あるコースを列記しておこう。

1. Economics of Agricultural Development.

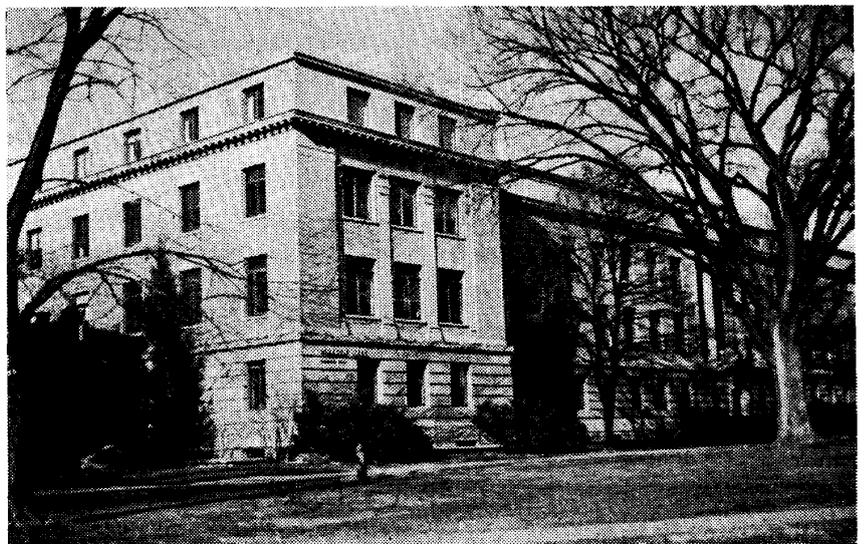


写真3 Dept. of Agricultural Economics
のある Warren Hall

2. Farm Organization in the United States
(for foreign students only)
3. Seminar on Comparative Rural Government
4. Seminar on the Economics of Agricultural Development
5. Seminar on Latin American Agricultural Policy
6. Seminar on Economics of Tropical Agriculture

1. にはわたくしも出席したが、若手のホープとみなされている Assistant Professor Mellor の熱心な講義が好評だった。この他、Dept. of Agricultural Economics からの Assistant Professor Poleman, Assistant Professor Luykx などの若手により、プログラムは推進されているようである。なお、Dept. of Agricultural Economics は Ford Foundation からの grant を得て、来年度から、Low Income Region に関する独自のプログラムをもつことになっている。

6. あとがき

アメリカの graduate students は、一般によく勉強する。ひとつには、よく勉強していい成績をとらないと勉強をつづけられなくなるからである。fellowship, scholarship, assistantship などは、ほとんど成績に準拠して決定される。だから ph. D コースの学生は、平均点85点以上とるために、マスター・コースの学生は平均点80点以上とるために、夢中になって勉強する。あまり、成績が悪いと放校される。この場合、徴兵制度のもたらす心理的影響も大きい。Graduate School の fellowship は、平均点90点以上あってもなかなかもらえないのだそうである。このため、学生達は、しばしば自分の興味のあるコースと

いうより、点をとりやすいコースをとることとなる。この傾向は、アメリカへ来たばかりのわたくしには大変奇妙なものに映った。これはアメリカの大学院制度のもつひとつの欠陥なのであろうが、学生達は適当に自分に興味のあるコースと点のとり易いコースを組み合わせさせてやっている。わたくしも第二学期目にはこの手を用い、成功した。

かれらは勉強するわりにはまたよくあそぶ。ウィークエンドはほとんど勉強せず、自動車を走らせてどこかへ消えてしまう。勉強の時間とレクリエーションの時間をたいへんはっきりと区別している。とくに undergraduate の学生に、この傾向は強いようである。比較的政治に関心がないと考えられているアメリカの学生も、ヴェトナム問題では、かなりエキサイトし、コーネルでも、しばしば講演会、すわりこみ、デモ行進等があった。もっとも話題を呼んだのは、軍事教練を受けた学生達の総長閲見式に、ヴェトナム戦争反対の学生達がすわりこみをかけた事件だった。わたくしの研究室にも一人ヴェトナム問題に大変熱心なアメリカ人学生がいて、よく議論をたたかわせていた。かれは自分達の前の世代を、“silent generation”と呼び、自分達の世代がこれからのアメリカをうごかしていくのだと熱心に説いていた。コーネルだけでなく、こうした“angry generation”の活動は現在のアメリカにおける一つの風潮であるらしい。もっともヴェトナム問題に関する知識人・学生の声は、ジョンソンの強力な政治力によって、黙殺されつづけているようであるが。

一年という月日は、またたく間にすぎた。わたくしは、来年度もコーネルで勉強をつづける予定でいる。アメリカという、とにかく巨大な混とんのなかで、最大限のものを吸収しながらも、自分を失なわず、着実に歩いて行きたいものだ。

—1965年8月—